

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00674

研究課題名(和文) 英米文学作品における歴史的文体研究としての英語表現史研究：身体表現の機能の解明

研究課題名(英文) A chronological study of body language in English and American literature with special reference to its functions

研究代表者

高口 圭輔 (Koguchi, Keisuke)

安田女子大学・文学部・教授

研究者番号：50195658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、身体に関する表現や身体の動きの描写が、どのような文学的な意味や役割があるのかを考察し、作家や時代によって、どのような類似点と相違点があるかを通時的な視点から研究し、英語表現史としての身体表現の本質と時代的な変化を探り、日本語で最初の研究書を出版することであった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大のため、各研究者がオンライン授業等の対応に追われ、予定していた研究成果を残すことができなかった。しかしこの間も、各研究者が身体表現に関わる用例の収集を継続するとともに、オンラインでの研究発表会を毎年開催し、各人が学会等で研究成果を発表し、本研究課題をさらに深化・発展させるように努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、これまで文学作品の身体表現に関しては、目や視線については論じられることはあったが、包括的な身体表現に関する文学的な考察はほとんど行われていない。海外では1997年にKorteのBody Language in Literatureが出版され、英米文学作品における身体表現の重要性が指摘され、英国の作家だけでなくアメリカ文学の作家からの用例も分析されているが、十分に体系付けられた研究とは言えない。本研究では、新型コロナウイルス感染症のため予定していた研究成果を残すことはできなかったが、各研究者が研究成果を発表し、日本語で最初の研究書を出版するという研究目的の準備期間とすることができた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research was to contribute toward the establishment of a comprehensive system of the functions of body language in the history of English expression in literature. The goal was to explore the literary meaning and role of expressions related to the body and descriptions of bodily movements, and to publish the first research book in Japanese on this topic. However, due to the expansion of the COVID-19 pandemic, each researcher was caught up in adapting to online classes and other necessary adjustments, which prevented them from achieving the planned research outcomes. Nonetheless, during this period, each researcher continued to collect examples related to body language and made efforts to hold annual online research presentations within our group conferences, which allowed researchers to share their findings at academic conferences, through papers and other scholarly events and further deepen and develop this research topic.

研究分野：英語文体論

キーワード：身体表現 英語表現史 通時の研究 共時の研究 英語文体論 コーパス言語学

## 1. 研究開始当初の背景

日本では、これまで文学作品の身体表現に関しては、目や視線については論じられることはあったが、包括的な身体表現に関する文学的・語学的な考察はほとんど行われていない。たとえば、Michio Masui の *Studies in Chaucer's Language of Feeling* (1988) に収められている“Chaucer's Use of 'Smile' and 'Laugh'” は、「微笑み」と「笑い」を手がかりに、人物描写だけでなく作品全体の構成との関わりを論じている。これは1957年に書かれた論文で、最も古い身体表現に関する優れた論考だけでなく、新たな研究の可能性を示唆する論文である。

海外では、1997年に、Korte の *Body Language in Literature* が出版され、英米文学作品における身体表現の重要性が指摘され、英国の作家だけでなくアメリカ文学の作家からの用例も分析されている。この著作は、これまで部分的には論じられていたことを身体表現の視点からまとめたもので、優れた著作ではあるが、十分に体系付けられた研究とは言えない。

身体表現は人間に根源的なものであり、作家や時代によって、どのような類似点と相違点があるかを通時的な視点から研究し、英語表現史としての身体表現の本質と時代的な変化を探ることは、言語の意味生成のプロセスを探るといふ点とも深く関わる、言語・文学研究において必要不可欠な研究課題である。本研究では、各研究者が異なる時代や作家を身体表現という一貫した視点で分析することによって、身体表現の表現史を包括的に、また歴史的に考察することが可能となる。

## 2. 研究の目的

本研究は、平成28年度から30年度まで採択された科研費のもとで行ってきた研究課題をさらに深化・発展させるための研究である。採択された科研費によって、英米文学作品の身体表現に焦点を当てた歴史的文体研究に関する研究事例をまとめ、平成30年10月、英文による論文集 (*A Chronological and Comparative Study of Body Language in English and American Literature*, 開拓社) を出版した。この論文集は英語史研究会の「英語史研究シリーズ」の第8巻目として刊行されたものである。本研究の目的は、この業績を踏まえて、顔・目・手・視線・動作などの身体に関する英米文学作品における描写の慣習と創造性を共時的・通時的視点から追求し、英語表現史研究の体系的な枠組みと身体表現の機能を明らかにする、日本語で最初の研究書を出版することである。また、本研究は、14世紀から19世紀までの英米文学史上の主要な作家を専門とする研究者による協働研究であり、文学作品の読みを中心に据えながら、言語学に基づいた文体論の知見を援用し、また用例の収集や分析にはコーパス言語学の方法論に沿ってコンピュータやコンコーダンサー等のソフトウェアを利用した研究である。

## 3. 研究の方法

本研究では、英語における歴史的文体研究に関して、文学作品の表現史の問題を身体表現の機能に焦点を当て分析をすすめる、体系的な英語表現史の姿を明らかにする。具体的には、各研究者は、担当している作家・作品の身体表現に関する表現のデータベースを構築する。項目は eye, eyes, hand, face, head, foot, leg などの身体に関する表現だけでなく、表情、仕草、行動など身体の動きの描写に関する表現を収集した。また、定期的に発表会及び打合せを行い、各人の研究の進捗状況について報告し、分析内容・分析方法等について議論一貫した分析方法が維持されるように配慮した。

本研究においては、文学作品の読みを中心に据えながら、言語学の考え方に基づいた英語文体論の知見を援用する。また、英米文学作品の研究にコンピュータを積極的に活用し、コーパス言語学の方法論を利用して、AntConc、CasualConc や WordSmith 等のコンコーダンサーやランカスター大学で開発されている文学作品を分析するためのソフトである Wmatrix 等を積極的に活用する。コーパス言語学の成果を援用しながら、文学作品をコーパスとして言語的な記述を行うとともに、その言語事実対して文学的な解釈を行うことによって、新たな歴史的文体論研究の方法論を提示していく。

令和2年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大のため、この3年間対面での研究会を開催することはできなかったが、少なくとも年1回(令和4年度は年2回)、オンラインでの研究会を開催し、啓蒙的な研究発表を実施するなど、各人の分析方法に新たな視点・視座を提案するとともに、各研究者が本研究課題に関する研究の進捗状況を発表し、その内容について参加者全員で議論を行い、本研究課題について一貫した分析方法が維持できるように努めた。

## 4. 研究成果

研究成果は、各人が国内外の学会やジャーナルで発表するだけでなく、本研究に関わるシンポジウムを開催するとともに、身体表現の機能を明らかにする、日本語で最初の研究書を出版する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、各研究者がオンライン授業等の対応に追われ、予定していた研究成果を残すことができなかった。しかしこの間も、各研究者が身体表現に関わる用例の収集を継続するとともに、毎年開催したオンライン研究会を通して本研究

課題に関する研究を深め、その研究成果を各人が学会や学会誌、研究会等で発表した。

渡辺(研究分担者)は、中世及び Chaucer の作品を中心に、顔・目・手・視線・動作に焦点を当て、どのような慣用的な身体表現が使われているかを調べた。その研究成果の一端は論文として発表されている。富村(研究分担者)は、Shakespeare の作品における身体表現、とくに手の描写と動きの描写がどのような役割を果たしているかを調査した。堀(研究分担者)は、18世紀から19世紀の英国の小説に見られる身体表現を通時的な視点から概観し、その用例を収集した。Body Language 研究会では、Juliet McMaster 著 *Reading the Body: Eighteenth-Century Novel* (2004) に記述された分析方法の紹介など啓蒙的な発表を行った。田畑(研究分担者)は、18世紀から19世紀の英国の小説に見られる身体表現に関わる語彙の使用頻度等をコーパス言語学の手法を援用して分析するとともに、研究会においては、英米文学作品のコーパスやコーパス言語学分野で使用されているソフトウェアを利用した分析方法等についての発表を行った。高口(研究代表者)は、Dickens を中心に身体表現の多様性を他の同時代の作家と比較して Dickens の身体表現の特徴を示すような用例を収集した。特に、手と鼻の描写、そして rub(こする)という動作との結び付きに注目した。齊木(研究協力者)は、Gaskell における視線の描写が人物描写と心理描写にどのように関わりがあるかを示す用例を収集した。池田(研究協力者)は、Austen や他の女性作家の作品における身体表現の中で視線や表情の描写に焦点を当て、人物描写と心理描写における視線や表情の描写との関係を探るとともに、身体表現と文化、社会、ジェンダーとの関係にも注目して用例を収集した。研究会においては、Ogden, Daryl による *The Language of the Eyes: Science, Sexuality, and Female Vision in English Literature And Culture, 1690-1927* (2006) の書評等も行った。竹下(研究分担者)は、アメリカ文学作品、とくに Mark Twain と Hemingway を中心に、アメリカ文学における身体表現、とくに表情や視線の描写に関して英国の作品との相違点に焦点を当てて用例を収集し、論文等で発表している。

各研究者が収集した用例や情報は共有され、上述したオンライン研究会において、各人が発表し議論を行い、個人の研究では不可能であった研究、つまり、異なる時代や作家を身体表現という一貫した視点で分析し、身体表現の表現史を包括的に、また歴史的に俯瞰するようにした。

例えば、共有した身体表現に関わる用例として、「形容詞+eyes」という結び付きについて、18世紀と19世紀の複数の作家に見られる特徴を次に示す基準で分類すると、時代または作家による目の描写方法の違いの一端が明らかとなる。

<基準>

- (1) 目の外観を描写: little eyes など
- (2) 目の印象を描写: charming eyes など
- (3) 一時的な感情描写: angry eyes など
- (4) 恒常的な性格描写: honest eyes など
- (5) その他: farsighted eyes など

まず、Defoe の *Robinson Crusoe* (1719) においては、次のような限られた用例しか見ることができない。

- (1): two broad shining eyes
- (2): 用例なし
- (3): 用例なし
- (4): 用例なし
- (5): the same eyes

Smollett の *Roderick Random* (1748) では、次のような用例を見ることができる。Defoe の場合よりもその用例は多いが、登場人物の感情描写や性格描写に関わる用例を見ることはできない。

- (1): little grey eyes, lively blue eyes, dim eyes
- (2): languid eyes, aged eyes, fierce eyes, enchanting eyes, owlish eyes, ravished eyes
- (3): 用例なし
- (4): 用例なし
- (5): many eyes

Fielding の *Tom Jones* (1749) では、次のような用例を見ることができる。目に関わる描写としてより多彩なものを見ることができるが、Defoe や Smollett の場合と同様に、登場人物の感情描写や性格描写に関わる用例を見ることはできない。

- (1): black eyes, bright eyes, dim eyes, dry eyes, large eyes, moistened eyes, shining eyes, sloe-black eyes, sparkling eyes, staring eyes, swollen eyes, uplifted eyes
- (2): fiery eyes, languid eyes, prettiest eyes, profane eyes, pure eyes, strongest eyes, unhallowed eyes
- (3): 用例なし
- (4): 用例なし
- (5): 用例なし

Richardson の *Pamela* (1740) では、先の 3 名の作家より多彩な用例を見ることができるとともに、登場人物の感情描写や性格描写に関わる用例が見られるようになる。

- ( 1 ): black eyes, red eyes, saucer eyes, staring eyes, tearful eyes
- ( 2 ): charming eyes, dear eyes, favourable eyes, fiery eyes, fine eyes, pretty eyes, speaking eyes, sweet eyes
- ( 3 ): delighted ones (eyes), half-affrighted eyes, pleased eyes
- ( 4 ): foolish eyes, watchful eyes, worthy eyes
- ( 5 ): different eyes, an hundred eyes, these surrounding eyes, weak eyes

最後に、Dickens の *Hard Times* (1854) に見られる用例を考察すると、Richardson と同様に、登場人物の感情描写や性格描写に関わる用例が多く見られるだけでなく、classical eyes や practiced eyes など、慣習的でない表現が見られるようになっている。

- ( 1 ): cavernous eyes, deep-set eyes, black eyes, dark eyes, blinking eyes, moistened eyes, winking eyes
- ( 2 ): classical eyes, thinking eyes, searching eyes, eager eyes
- ( 3 ): distracted eyes, woeful eyes, bold eyes
- ( 4 ): cold eyes, trusting eyes, confiding eyes, gentle eyes, pleasant eyes, not too sober eyes, practiced eyes
- ( 5 ): both eyes, all eyes, many eyes

上記の分析は限定的な調査であるが、身体表現としての目の描写に関して、歴史的な表現の発展と多様性の一端を考察することができる。このような分析結果を積み重ね、英語表現史における身体表現の機能を明らかにする日本語で最初の研究書の出版を目指していきたい。

本研究課題に関わる研究期間での具体的な研究成果は、次の「主な発表論文等」で示すように、各研究者が学会やジャーナル、研究会等での口頭発表や論文による発表等を通して公開され、各人が本研究課題をさらに深化・発展させるよう努めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡辺拓人	4. 巻 70 (1-2)
2. 論文標題 現代英語における“wring one's hands”の意味変化とイディオム化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 商学論究	6. 最初と最後の頁 727-742
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺拓人	4. 巻 70 (4)
2. 論文標題 中英語文学における“wring one's hands”についての一考察：中英語口マンスとチョーサー作品を中心にして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 商学論究	6. 最初と最後の頁 133-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竹下裕俊	4. 巻 第55号
2. 論文標題 ヘミングウェイ作品における登場人物の指示表現の役割 「季節はずれ」を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 尚綱大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹下裕俊	4. 巻 第54号
2. 論文標題 ヘミングウェイの表現の諸相 「白い象のような山なみ」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 尚綱大学研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀正広	4. 巻 第94回大会
2. 論文標題 違和感とdistant reading	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会第94回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noritaka Tomimura	4. 巻 第63・64合併号
2. 論文標題 A Comparative Study in the Use of Music in Morality, Miracle, and Shakespeare's Plays	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 熊本大学英語英文学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹下 裕俊	4. 巻 第21号
2. 論文標題 “ The Short Happy Life of Francis Macomber ” における登場人物の指示表現について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヘミングウェイ研究	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹下 裕俊	4. 巻 第53号
2. 論文標題 登場人物の指示表現に見るヘミングウェイ作品 「医者と医者妻」を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 尚絅大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田裕子	4. 巻 50
2. 論文標題 庭から海へ ジェイン・オースティンの『説得』におけるアンの歩み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学と評論	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田裕子	4. 巻 63・64合併号
2. 論文標題 しなやかな知性 ジェイン・オースティンの『説得』を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 熊本大学英語英文学	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高口圭輔	4. 巻 第30号
2. 論文標題 Dickensの身体表現に関する一考察 “his hands in his pockets” に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語英米文学論集 (安田女子大学英語英米文学会)	6. 最初と最後の頁 1-12、
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Ikeda	4. 巻 61/62
2. 論文標題 “ I Love an Open Temper ” : “ Openness ” and “ Reserve ” in Jane Austen ' s Emma	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kumamoto Studies in English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 87-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀正広	4. 巻 No. 6
2. 論文標題 私の本棚	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 93-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 シンポジウム「英語読解力再考：英語が読める」とはどういうことか」において「違和感とdistant reading」
3. 学会等名 日本英文学会94回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 British National Corpus (BNC)を教育と研究に活かす
3. 学会等名 神田外語大学言語教育研究所 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 ディケンズの英語
3. 学会等名 岐阜市立女子短期大学 (招待講演)
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 Body Languageに関する研究
3. 学会等名 Body Language研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田畑智司
2. 発表標題 トピックモデリングを利用した文体分析
3. 学会等名 Body Language研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 Dickens Lexicon Digitalの定義入力における問題点
3. 学会等名 科研発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 Reading the Body: Eighteenth-Century Novel (2004) by Juliet McMasterを論じる
3. 学会等名 Body Language 研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高口圭輔
2. 発表標題 Dickens Lexicon Digitalの定義入力の問題点について
3. 学会等名 科研発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田裕子
2. 発表標題 The Language of the Eyes: Science, Sexuality, and Female Vision in English Literature And Culture, 1690-1927 (2006) by Ogden, Daryl を論じる
3. 学会等名 Body Language 研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内大輔, 川田智子, 倉本高弘, 高橋真理子, 富村憲貴, 野村美貴子, 丸尾喜久子, 三宅珠穂
2. 発表標題 ラウンドテーブル「遠隔集団即興演奏の可能性を議論する」
3. 学会等名 日本音楽即興学会第12回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀正広
2. 発表標題 シンポジウム「これからの英語コーパス研究」：「英語表現史における身体部位の描写について」
3. 学会等名 日本英文学会九州支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田裕子
2. 発表標題 ジェイン・オースティンの歩く女性たち 『説得』のアンの歩みを中心に
3. 学会等名 熊本大学英文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 堀正広（共編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 英語コーパス研究シリーズ第1巻 『コーパスと英語研究』	

1. 著者名 堀正広（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Red Moon Press, USA	5. 総ページ数 515
3. 書名 Haiku as Life: A Kaneko Tohta Omnibus	

1. 著者名 文学と評論社編（池田裕子）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 251
3. 書名 比喩－英文学の視点から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡辺 拓人 (Watanabe Takuto) (00734477)	関西学院大学・商学部・助教  (34504)	
研究分担者	堀 正広 (Hori Masahiro) (20238778)	熊本学園大学・外国語学部・教授  (37402)	
研究分担者	竹下 裕俊 (Takeshita Hirotooshi) (20236459)	尚綱大学・文化言語学部・教授  (37404)	
研究分担者	田畑 智司 (Tabata Tomoji) (10249873)	大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・教授  (14401)	
研究分担者	富村 憲貴 (Tomimura Noritaka) (40595980)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授  (17401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	池田 裕子 (Ikeda Yuko)		
研究協力者	齊木 愛子 (Saiki Saiki)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------